

第6回

パンデミアのために
デザインで世界を変える!

「Pandemia」(すべての人々に)。

このギリシア語の「Pandemia」から「Pandemic」という言葉が生まれたと言われている。世界はパンデミックに陥ってしまった。「豚インフルエンザ」がいつの間にか「新型インフルエンザ」と名辞され、日々メディアで連呼されている。情報不足の不安感でなんだか割り切れないものがある。

私が3年前に予知していたことが現実になった。これは私の予知である。予測ではない。あくまでも直感的で動物的な勘であった。この予知には、3つの背景がある。まずは「温暖化の予測違いへの苛立ち」である。私も学者のひとりとなれば、地震学や気候学は「学」ではないと思う。地震がいつまでも「予知連絡会」でいいのか、それは「論」にすぎないだけだ。気候の学問も予報にすぎないから「論」と言っておくべきだ。

次に「世界の交通手段の進歩」。これは「ジャンボジェット機は本当に正しい乗り物なのか」ということを再検証しておくべきだ。願わくば、自分用のジェットを所有したいというほどの野望があるが、一方ではデザイナーとして、モノとしての完成度を疑っている。

最後に「テロ手段としての生物兵器かも」である。生物兵器という発想がテロ集団にあ

ったとしたら、とても怖い現実だ。世界的に性悪説が人間社会のベースになっている。

だから私は、北朝鮮には強い態度で臨むべきだと思っている。ところが、一部の国会議員の頭の固さにあきれかえる。また「わが国も核兵器を持つ」との意見が出てきた。馬鹿か! そんなことをしたら広島と長崎で死んでいった36万の人たちにどんな言いわけができるというのだ。

私なら北朝鮮にミサイルを発注して買い上げる。北朝鮮も、世界中も、あっと驚くだろう。買い上げたミサイルは迎撃用に配備する。このブラックユーモアを含んだやわらかい発想こそ、デザイナーの思考だ。これこそデザインが世界を変えていくこれからの世界変革の手法なのだ。いつも私は、やわらかい発想を懸命に考え出している。

こうした予知から、私は「Peace-Keeping Design=PKD」という世界的なデザイン運動に手をつけてしまった。

「ワクチンだ!」ということで、そのシリンジ=注射器の形態とシステム全般のデザインを進めている。この「ワクチンだ!」という発想自体、なぜ、そうなったのか私にもわからない。敗血症で重篤状態から生き返ったときに、准教授を病室に呼んで、ワクチンの研究を指

示してスケッチを渡した。それから考え直した。「うーん! なんでワクチンなんだ?」。

大阪大学は、1724年に5人の商人が創設した懐徳堂から1838年の適塾を歴史的な系譜としている。適塾の創設者である緒方洪庵は、日本で最初に天然痘の撲滅を果たした人物であった。だから、微生物研究所=ワクチン開発の歴史がある。幸いにも私は、医学部附属病院の未来医療センターの教授も兼任しており、ここでPKD活動が支援されている。

結論は、私には緒方洪庵どころか、越前からの超優等生の橋本左内がいる。洪庵は言ったという。「後世、適塾が評価されるなら、橋本左内の能力の開花だ」と。さらには、微生物研究所長・藤野恒三郎教授(腸炎ブリオの発見者)も、故郷の偉人たちが応援してくれているんだ、とさえ思い込むようにしている。「彼らからの啓示なんだゾー!」って。だからPKDを「絶対に世界的なデザイン運動にする!」と決めてしまった。今では、すっかり「デザイン+医学」で「命と向き合うデザイン」は、私の阪大研究室のテーマである。

そして5月18日に、テレビ東京の「カンパリア宮殿」に出演した。これは経済番組だが、ワイフには「出演したいなあ」ってときどきもらしていた。理由は2つあった。ひとつは、



番組の構成がいつも詳細に練り込まれていることが明白だからだ。もうひとつは、番組ホストの村上 龍の存在がある。

小学校高学年から中学時代に、私は将来「作家=小説家」になると決めていた。そのために、高校時代の受験勉強を辛いなんて思ったこともなかった。とにかく医学部進学、そして芥川賞受賞という妄想の中にいたが、結局は美大へ進学、それでも最終的には小説家になると決めていた。

1976年の小説「限りなく透明に近いブルー」。この題名と書き出しで私は完璧にやられてしまった。この題名は、当時の花形コピーライターのチャラチャラした表現を「文学というレトリックの強さ」で見せつけたものだ。さらに小説の冒頭、「虫」を見つめる視線を読者に即効的に埋め込んでしまう。当時の私は、東芝のデザイナーだったが、帰宅すれば小説誌の「文学界」か「群像」への応募作を書いていた。つまり、「小説家」にもなろう!なんていう甘さがあった。これは、村上龍の登場で叩きのめされたのだ。

この番組出演依頼があると、すぐにこの話をした。そうしたらなんと、スタジオでの番組収録時に、村上氏は初版本を探してくれていた。私は、32年という「時」をため込んで

彼に「逢えた」。放送された内容は、制限時間の中でよくまとめていただいた。これまでの思い出をスタジオではいっぱい語れて、自分はこんなに精進してきたと思うとグッとこみ上げるものさえあった。

このところできるだけマスクミに露出してやろうかと考えている。なぜか? それは退官したら発表したいことが山ほどあるからだ。今のところ2つの番組に追いかけてられている。ただし、放送になるかどうかは怪しい。途中でケンカするかもしれない。

私は、メディアに露出する場合は、「川崎和男という商品を消費しているか」ということを考える。だから、軽薄なテレビスタッフや編集スタッフたちと仕事をすると、またしても「喧嘩」してしまう。

昨年は、私がデザインしたメガネを米国副大統領候補のサラ・ペイリンがかけた。そのことによる商品と情報の世界的な消費がさらに私をかき立てている。それこそ「予知・勘」は増加している。こうしたことが次々と私を新しい世界に連れ出そうとしている。

私は6月に渡米する。昨年末に在米シカゴ総領事館から依頼があった。そこで国際交流基金からの支援となり、ワシントンとニューヨーク、シカゴではイリノイ工科大学で

の講義など次々と予定が決まっている。これで私はPKDを米国に持ち込める。

私は「デザインで世界を変える」とまで言い切ってきた。これには、絶対的な「予知と勘」があった。「私は啓示を受けているんだ。私には、橋本左内も日下部太郎もついている」と思い込んでいる。

日下部太郎はほとんど知られていない。これはあらためて紹介しておかなければならない故郷福井の偉人だ。日本のパスポートナンバーは2番目という人物。私の予知力=勘を突き動かしているのは、彼らからの啓示である。なんてことを言えば、勘違いと言われるかもしれない。けれども私には、啓示が使命になる。だから、妥協はしない。妥協というなら、「妥協=調和ある合意」まで昇華させる。この啓示は研ぎ澄ました感覚で突然に来るべくして来るわけだ。そうしたら、とんでもないところから、デザインディレクターの就任を依頼されてしまった。

サラ・ペイリンがかけたメガネフレームや人工心臓モデルがこれらを後押ししてくれていることは間違いない。私は、それこそ「すべての人々に」デザインの思想を「かたち」で「Pandemia」して、「世界をデザインで変えたい!」のだ。

